



## 神田茂記念賞を受賞して



### 五味 一 明

赤門の前からタクシーに乗りこむ。両側の町並に車と人が連らなって流れる。急に、50年以上昔の記憶が頭によみがえる。神田清先生につれられ、始めて三鷹官舎の神田茂先のところへ伺ったのも、確か此所からであった。同じ此所から、今日は西麻布の霞町まで。神田茂記念賞を戴いた受賞者御一同と、先生の墓参りに向うのが何かの縁しに感じられる。

変光星の観測を天文月報に一生懸命で報告していた頃、一日、先生を官舎におたずねした。五味が一番始めによこした手紙だと、墨筆の私の父の手紙を、先生は持出された。日本天文学会流星観測用紙(例の、古い大判のあれだ)を2,3枚お送り被下度事、伴一明を宜敷御指導願度とある候文の書信であった。先生は12,3才の小生まで、奥さんと一緒になって世話をして下さったのである。だから、先生を想うときは必ず、奥さんが一緒に浮かんでくる。あのアカデミックな中において、以来、我々素人どもを飽きもせず御指導下さった気持はどこにあったのか。

大正13年頃から「天文月報」に観測欄が作られ「変光星の観測」が発表されはじめた。古畑正秋君は諏訪中学校へ入学した頃から、三沢勝衛先生や河西慶彦氏の指導を受けて、私達と友達になり、観測欄へ名前が出た。黒岩五郎君は1年ばかり後から観測欄へ発表をはじめ、まだ顔も知らない年代がかなり長かったが、文通のやりとりなどですでに友達であった。

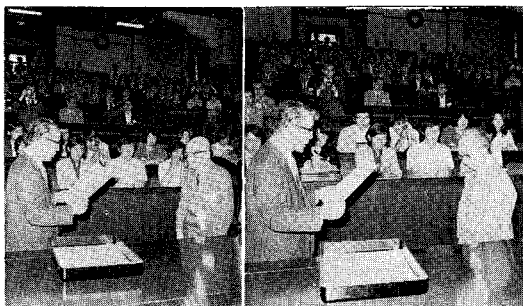
昭和11年6月の北海道の日蝕は、古畑正秋君と10年も待った日蝕であった。私達は古畑、黒岩と3人で行くことに決めていた。が、此の時、古畑、黒岩両君は東京大学星学科の1年坊主である。学校があるからお前達はならぬと、行くのを止められていた。学則?を破っても出かける決心で、観測準備に神田先生の官舎の庭を使わ

せていただいた模様が、古畑から私に届いた手紙に、細かく書かれている。物静かだった先生の何処にあれだけ激しい気魄が秘められていたのか。我々人は秘密観測隊と自称してこっそり北海道へ渡ったのだったが、新星の出現で、悪事はばれてしまった。先生御夫妻は、本当にわが事のように喜んで下さった。

いまは、先生のお宅に電話も手紙も差上げられなくなって久しい。「3色フィルターを通してのぞく変光星は、肉眼で直接見るとの様子がかなりちがうものです」と経験を述べ、「ああそうですか」と短い御返事であった。思えば永い永い間教えて戴いた先生である。もうこういう方は、私の人生には無いと思った時に、先生との別れが悲しかった。

先生からは、大勢の人達が指導を受けたのだが、ガキの頃から先生の亡くなるまで、ただ迷惑と世話をかけばなしの不肖極る弟子であった私などが記念賞を戴くとは、私を選らばれた委員の諸先生方がうらめしい様な気さえ湧いてくる。私でなくとも、受賞されて当然の人があったろうに。

霞町でタクシーを捨て、墓地の参道を一団になって登る。曇天の夕方は、初夏ながら、もはや薄暗い。墓地には神田泰君が待っていてくれた。墓石を拝むと、先生に先だつて亡くなった奥さんの葬儀の折がふと思いだされる。先生は、奥さんとのそもそもの始まりからの話を、なんとも言えず細やかな情愛をこめて話された。先生の口からはなやかな話を伺ったのは、永い間に、ただこの一度だけだったと記憶する。墓前に立つ。「五味、散々世話を焼かせた上、ほうびまで貰ったか。せめて残り少ない人生をしっかりとやれよ」私の身体を感動が走った。



清水真一氏

五味一明氏

